

道風

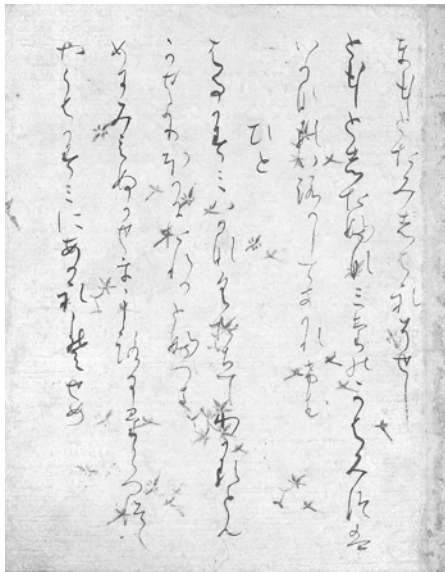
道風記念館だより
第60号

発行日
令和3年9月15日
編集・発行
春日井市道風記念館
春日井市松河戸町5-9-3
電話 0568-82-6110

収蔵品紹介

伝藤原公任筆石山切

京都の西本願寺には柿本人麻呂、紀貫之ら三十六歌仙の歌を一人一冊（人麻呂、貫之、能宣は各二冊）にした歌集のうち三十七帖（三十二帖が当初の原本、五帖は後世の補写本）が保存されています。「本願寺本三十六人家集」と呼ばれ、国宝に指定されています。染紙、唐紙だけではなく、色違いの薄紙を何枚か重ねて切ったり破ったりして、それを継いで一枚の料紙にする継紙や、金銀の箔、砂子を撒く、金銀泥で下絵を描くなど、当時の工芸技術の粋を集めた華麗な料紙が使われています。天永三年（一一二二）、白河法皇六十歳のお祝いの贈り物として制作されたものだと推定されています。藤原行成の曾孫、藤原定実とその子の定信を中心として、当時の能書二十人が分担して書



二〇〇×一五・八cm

写しています。

さて、昭和四年（一九二九）、浄土真宗本願寺派第二十二世法主の大谷光瑞は、茶人として著名な益田鈍翁に相談して、本願寺本三十六人家集のうち、貫之集下、伊勢集の二帖を分割、頒布することにしました。女子宗教大学（現在の武蔵野大学）創設の資金にあてるためです。このときまでは原本が三十四帖あったということです。この分割された断簡が今回ご紹介する「石山切」です。本願寺十世の証如が後奈良天皇からこの三十六人家集を下賜されたころ、本願寺が摂津国の石山（現在の大阪城付近）にあったことから、鈍翁によって名づけられました。

当館所蔵の石山切は伊勢集の断簡です。藤原公任筆と伝称されますが実際の筆者は不明です。伝藤原公任筆葉平集切など、同筆の古筆があります。一方、貫之集下は金沢本万葉集などと同筆で、藤原定信筆です。貫之集下は定信特有の右上がりの速書きであるのに対し、伊勢集は落ち着いてゆったりと筆を運んでいます。料紙裏面の断簡なので華やかな装飾はありませんが、白の唐紙に雲母を一面に撒き、銀泥で鳥や草花の下絵を施しています。右端の荒れた部分は、糊で料紙を貼って作った粘葉装の冊子本であったことを示しています。

ともくとたみしはれぞせし

ともくとしたふなみだのかはみづは

いかなるいろかしてながれけむ

ひと

はるがすみはかなくちちてわかるるとも

かぜよりほかにたれかとふべき

めにみえぬかぜをころにたぐへつゝ

やらばかすみにあかれこそせめ

中国古代の簡牘 2 古代の書写材料

福田 哲之

紙が普及する以前、中国では、竹簡や木簡が書写材料として広く用いられており、とくに書物など文字書写の中心的な位置を占めていたのは竹簡でした。竹簡の素材となる竹は、古代中国において、西北辺境地帯などの一部をのぞく広い地域に生育し、容易に入手することができました。今からおよそ五千年前の新石器時代の遺跡からは、竹製の箕や籠・敷物などが出土しており、早くから生活用品の素材として用いられていたことが知られます。

古代の書写材料は、簡単にしかも大量に入手できることが重要な条件となるため、地域によって違いが見られます。例えば、古代メソポタミアの書写材料は、チグリス・ユーフラテスの二つの大河の流域で採れるきめの細かい泥で作った粘土板でした。また古代エジプトでは、ナイル川河口の湿地帯に自生するパピルス草の茎の繊維を重ねて薄いシートに加工したパピルス (papyrus) が用いられました。エジプトのパピルスは、その後地中海からヨーロッパにかけての広い地域で書写

材料として用いられ、紙を意味する英語のペーパー (paper) の語源となりました。メソポタミアでは、粘土を建築資材の日乾煉瓦や土器などに利用しており、エジプトでは、パピルスで布地や船の帆などを作っていました。古代人たちは、日常生活の中から文字書写に適した素材を見つけ出し、地域に応じた書写材料として利用したことがわかります。

また、それぞれの材料に応じて、竹簡には毛筆と墨を用いて漢字が、粘土板にはまだ粘土が柔らかいうちに先端を三角に加工した葦ペンを押つけて楔形文字が、パピルスには先を尖らせてほぐした葦ペンとインクを用いてエジプト文字が記され、独自の文字文化を開化させていったのです。

それでは中国における竹簡の使用はいつ頃から始まったのでしょうか。出土した実物の資料としては、今のところ戦国時代 (紀元前五世紀〜紀元前三世紀) の竹簡 (図1) が最古です。もちろんこれはそれ以前に竹簡が使用されていなかったことを意味するわけではありません。

竹簡の起源を探る上で貴重な手がかりを与えてくれるのが、今から三千数百年前の殷代後期の甲骨文です。甲骨文の中には、竹簡を横糸で綴じた様子を象つたと見られる「冊」字 (図2) があり、その中には竹簡の書物を恭しく両手で捧げ持つさ

まを表した「典」の初文と見なされる例も存在することから、当時すでに竹簡が用いられていたと推測されています。

また『尚書』(書経) の中で西周時代にさかのぼる最も古い成立と見なされる、周書の多士篇に「惟れ爾、殷の先人に冊有り典有りて、殷の夏命を革めしを知る (おまえたちは、殷の先祖に冊書や典籍があり、そこに殷が夏の命を革めたことが記されているのを知っているだろう)」という記述が見えることも、殷代に冊書が存在した証拠とされています。

中国の古代文字と言えば、亀甲や牛骨に刻まれた甲骨文や青銅器に鑄刻された金文がよく知られています。そのせいか殷や西周の時代には、もっぱら甲骨や青銅器に文字が記され、竹簡や木簡は時代が降ってから使用されるようになった、と理解されることもあるようです。

ここで留意されるのは、書写材料には大別して、文字の書写を主たる目的とするもの (第Ⅰ類) と、他の目的をもつもの (第Ⅱ類) とがあることです。中国の竹簡や先ほど紹介したメソポタミアの粘土版、エジプトのパピルスなどは第Ⅰ類に属し、身近で大量に入手しやすい素材であるという共通点



図1 戦国竹簡 (部分)



図2 甲骨文「冊」字 (4例)



図3 甲骨文 第一期

をもっています。これに対して、甲骨や青銅器は第Ⅱ類に属します。

甲骨文(図3)は「卜辞」(占卜)ともよばれるように、その内容の大部分は占い(占卜)にかかわることばです。甲骨を用いたのは、裏面に鑽とよばれる円形のくぼみと鑿とよばれる切り込みを作り、鑽を灼いて表面に「卜」型または「一」型のひびわれ(卜兆)を生じさせ、王がその卜兆を観察して神の意思を読み取り、判断(占断)をくだすためでした。この一連の占卜の儀礼の最後に、占いを行なった日付、占いを担当した貞人の名前、占いの内容、王の占断、占断の結果がどのように実現したか、などを卜兆の付近に刻したものが甲骨文です。

この手順からも明らかのように、甲骨が用いられた目的は占いのためであり、亀甲や牛骨は、特別で神聖な材料であったと考えられます。

同じことは、青銅器に鑄刻された金文(図4)にも当てはまります。殷周の青銅器の多くは宗廟に安置して祖先をお祭りするための神聖な儀器であり、その表面には神々などをあらわす複雑で神秘的な模様が鑄造されています。金文の多くは容器の内側の側面や丸底などに鑄込まれていて、さ



図4 殷金文(拓本)

さまざまな記号や祭祀の対象である父祖の名、その青銅器を作った由来などが記されています。

内側の曲面にどのようにして筆写した銘文を鑄造したのかについては、研究者のあいだで見解が分かれており、現在でもなお定説と言える段階には至っていません。いずれにしても高度な技術を伴う作業であったことは明らかで、銘文の鑄造は祖先祭祀の一環としてきわめて重要な意味をもっていたことがわかります。

殷代後期には、こうした宗教儀礼を目的とする第Ⅱ類の甲骨や青銅器とは別に、文字の書写を主たる目的とする第Ⅰ類の竹簡を用いて、王室の記録や文書などが筆写されていたと考えられます。しかし竹簡は長い年月のあいだに朽ち果ててしまい、腐りにくい甲骨や青銅器が残存した結果、殷代の文字と言えどもつばら甲骨文や金文を指すことになったと推測されるのです。

殷代に竹簡が用いられていたとすると、甲骨文以前の漢字史の空白期について、一つの見通しをもつことが可能となります。よく知られているように、殷代後期の甲骨文は、現在確認される最古の漢字です。発見された当初

は、漢字の起源にごく近い始原的な段階の文字と見られていました。しかし、その後研究が進むにつれて、すでに一定の発展を遂げた段階の漢字であることが明らかとなり、現在では多くの学者が甲骨文以前にかなり長い漢字の歴史が存在しただろうと推測しています。

殷墟から出土した甲骨は、断片もあわせて十数万点と言われ、時代順に五期に区分されます。これらを見ると、最も古い第一期の甲骨(図3)にもすでに多くの漢字が刻されており、決して第一期から第五期へと時代が進むにつれて発展していくような形跡は認められません。最初から漢字がパツと出揃ったような印象を受けるのです。こうした状況も、甲骨文以前にすでに竹簡による文字書写の歴史が存在したとすれば、きわめて自然に了解されます。

先に紹介したように、現時点ではまだ甲骨文の「冊」字や『尚書』多士篇の記述など間接的な証拠にとどまっていますが、殷代に竹簡が用いられたことを実証する資料の発見が期待されるどころです。

(島根大学教授 ふくだ・てつゆき)

図版出典

- 図1 湖北省博物館編『書写歴史―戦国秦漢簡牘』文物出版社、二〇〇七年
- 図2 劉釗主編『新甲骨文編(増訂本)』福建人民出版社、二〇一四年
- 図3・図4 松丸道雄(解説)『中国法書選1 甲骨文・金文』二玄社、一九九〇年

令和3年度 スケジュール（後期）

9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
	<p>開館40周年記念特別展 「書的美、書の価値 ～つたえるということ～」 ～10月3日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「つたえる」ということをテーマに、文字の成立や日本の書の流れをみる。古代中国の文字資料、空海・小野道風・藤原佐理ら平安時代の能書の真筆、一休や千利休ら著名人の書などを展示。 							
	<p>開館40周年記念企画展 「書のまち春日井」 10月8日～12月5日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・春日井はどのようにして「書のまち」になったのか。小野道風顕彰活動の軌跡を紹介し、あわせて「書のまち春日井」の書家の作品を展示。 ・10月23日(土) 開館40周年記念式典・講演会「書のまち春日井」を開催 							
						<p>館藏品展 「文字の造形」 1月6日～3月6日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・館蔵の近現代の書作品のなかから、様々な書体を素材とし、多彩な書表現をもちいた書作品を紹介し、文字の造形美を楽しむ展覧会。 		
<p>展覧会</p>								
<p>常設展示</p>	<p>小野道風をはじめとする 平安時代の書について</p>			<p>12月6日から1月5日 工事による臨時休館</p>				

※内容・会期等を変更することがあります。

開館40周年記念「私の好きな言葉」展

開館40周年の記念の年に道風記念館へ来館された方・ハガキ書作品を出品された方による参加型の展覧会。座右の銘など、「好きな言葉」を毛筆で書いたハガキ書作品を募集します。道風記念館2階ホールで展示し、展示風景をウェブサイトで公開します。

- ◆ 募集期間 令和3年4月1日(木)～令和4年3月31日(木)
- ◆ 展示期間 新着500点展示
令和3年4月1日(木)～10月31日(日)
全作品展示
令和4年3月1日(火)～5月8日(日)



※出品規程があります。詳しくはチラシまたは道風記念館ホームページをご覧ください。道風記念館にお問い合わせください。